

聖書 マタイによる福音書1章18～25節

18 イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。19 夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。20 このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。21 マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」22 このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。23 「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。24 ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ、25 男の子が生まれるまで、マリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。

《説教》『インマヌエル、神は我々と共におられる。』

◆私たちは先週、バプテスマのヨハネの誕生、その命名、そして割礼という儀式のことで通して、私たちはこのようなメッセージを受けました。つまり、神様の御意思によらない人生は一つもないという事。それ故に、どの国の、どの人の命も疎かにされてはならないのだという教えを、私たちは聖書から聞きました。その時のキーワードは「割礼」という言葉でした。わたしはこれまで「割礼」という事を重視しませんでした。それはユダヤ人が生後八日目に男子が受ける儀式ですね。その時に命名するわけです。しかしこの「割礼」が持っている意義は、今申しましたように、本当にすべての人が、神様の御意志によってこの世に生を与えられたのだということを忘れないように、神様が定め、求め給うた儀式なのです(参照：創世記17章1節～22節)。

◆今朝は、処女マリアの受胎という、イエス・キリストの誕生に関わる記事を読んでいただきました。このことを通して私たちが聞きますメッセージは、神がその人と共におられないような人はこの世に一人もいないということであり、今日の説教題は、聖書から取って、そのまま付けました。「インマヌエル、は我々と共におられる。」インマヌエルはイスラエルの言葉であります。今日私たちが聞きますメッセージは、「インマヌエル＝神は我々と共におられる」ということでもあります。ですから先週の「割礼」と、今日の聖書を通して私たちに与えられる使信は、神様の御意志によらない人の命は一つもなく、そして「しゅうせい」には、「終生」と「終世」の二つがあるのですが、つまり私たちの「人生の終わり」までと、「この世の終わり」までとの二つです。神様は、私たちと共にいまして、その人生を、祝福をもって全うしてくださるということでもあります。それゆえにこそ、私たちも今・ここにあることを得ているのだということでもあります。

使徒パウロは申しました。「ただ神の恵みによって、わたしは今日あるを得ているのです」と。これはコリント前書15章にある言葉です。「復活の章」です。正にパウロは、神の恵みによって復活させられた人なのですね。その彼が「わたしは神のめぐみによって今日あるを得ているのです」と言います。これはパウロ一人の告白でなくて、すべてのキリスト者の告白であり、また全てのキリスト者が、全ての人の告白になることを願っているところのことでもあります。

◆それにしましても、今日の聖書に記されている、いわゆる「処女降誕」という事がありますが、事もなく乙女が身ごもるということは、いまだきの少年、少女でさえ、そんなことはあるはずがないと、笑い飛ばします。そしてある人は、当時マリアはまだ13歳か14の娘だと言います。私はハイティーンのはじめとっていますが、要するに、10代の半ばのマリアが身ごもるわけであります。そしてそれは、事もなくというよりは、今日の聖書によれば「聖霊によって」マリアはイエスさまを宿したというわけです。そしてそれが事実なのでありますけれども、事もなくそんなことは起こらないと、これを笑う人は、その昔から今に至るまで実に多いのであります。このことは何も現代人が特に賢いからとか、理解が進んだからというという訳ではありません。この世の初めからみんなが知っていることであります。

◆今日の聖書にまいります。マリアの婚約者はヨセフです。もう婚期は近づいていたと思いますね。二人は両家で言い交した「許嫁」ですね。結婚が迫った時にもう一度確認して「婚約者」になります。そして今日の聖書に出てまいります婚約者ヨセフも、そんなことはあるはずがないと思ひ、そして自分は全く関与していないのですから、ヨセフは死ぬほど思い悩んでいるわけであります。そして旧約聖書に記されている通り、イスラエルの掟では、そのような不貞を働いた者は、村の広場に引きずり出して、みんなで囲んで、石で打ち殺す。これがイスラエルの厳しい掟であります。それゆえにヨセフは悩み苦しんで、ひそかに離縁しようと考えたのです。その時に御使いが現れて事の真相を告げるのです。もしこの時、主の天使がヨセフに現れて真相を伝えなかったら、つまり、神の御心によって、御霊が降って、マリアが受胎したのだということを、御使いがヨセフに告げなければ、ひょっとしたら、ヨセフは秘かにマリアを連れ出して、マリアを殺してどこかに埋めて、そして自らも疾走するというような、近頃毎日のようにわたしたちが聞かされる、そういう事件が、このナザレの村にも起こったかもしれません。

◆話は飛躍しますが、もしそういうことであるならば、私たちが今ここにこのようにして、恵みのクリスマス、この「クリスマス」という言葉は、先日の聖書を読む会の時に、食前のお祈りを孝子さんにしてもらいましたが、お祈りの1節にこういう言葉がありました。「どうか、みんながキリストを拝むようになりますように」。私たちは神様を「拝む」のです。そのようにみんなの人が「キリストを拝む」。それが、本当の「クリスマス」なんですね。ですから、「クリスマス」ということに含まれる中身は、それこそ聖書が語っている通り、限りなく豊かなのであります。もし、ヨセフに御使いが現れて、「決して、不倫があって、マリアが子を宿したのではない。神様の御心で、神ご自身が、霊において下り、マリアに宿り給うたのだ」と言うことを、み使いは告げるわけ

ですね。そこで彼はマリアを迎えます。もしそれこそそのようなことでなければ、今日私たちが「キリストを拝む」というクリスマスということはなかったはずであります。

◆上で申しましたけれども、パウロは「わたしはただ神の恵みによって今日あるのです」と言いましたけれども、また別のところでは「もはや、わたしが生きているのではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです」とも言っておりますけれども、つまり「キリストは聖霊においてこの私の内に宿っておられるのです」と、まるでマリアの言葉のようなことをパウロが言っています。そしてキリストがパウロのみならず、ペトロをはじめとする弟子たちに、キリストが聖霊において宿り給うということがなければ、そもそもキリスト教の誕生はなかったのであります。

◆それで「処女降誕」ということは、聖書に記されている通りでありますけれども、私は改めて、この聖書という書物は、真実なことを書いているのであって、この聖書の記述は、私たちが信頼してもよい、信じてよいということを、今回改めて思いました。と申しますのは、今日は、マタイによる福音書の1章18節から読みましたが、その前に書かれてあるのは何かといいますと、「イエス・キリストの系図」です。先祖アブラハムからキリストに至る42代の系図がここに、新約聖書の冒頭に記されております。第1節に「アブラハムの子ダビデの子、イエス・キリストの系図」とあります。私が、特に聖書は信頼してよい、信頼すべきだと思うのは、1章6節です。「エッサイはダビデ王をもうけた。ダビデはウリヤの妻によってソロモンをもうけ」とあります。ソロモン王というのは、あの栄華を極めたソロモン王です。ダビデの子です、次男ですね。不倫によってウリヤがダビデの子をやどしますけれども罰をうけてその子は死にます。そしてそのあと生まれたのが、ソロモンです。ソロモンがイスラエル南北王朝を統一したダビデの後を受けてイスラエルの王になります。そして全盛を極めるわけです。

◆普通、「系図」を記そうとする場合は、先祖の不徳の事実を書きません。系図を記す動機は、先祖に大した人物がいる場合です。この聖書の系図のように、「自分たちの先祖にダビデがおり、ダビデは部下ウリヤの妻バテシバを奪って、生れた子がソロモンなんです」と言ったことは書きません。しかし、ここには書いてあります。これは不倫の系図です。そして冒頭に出てくるのは「アブラハム」です。アブラハムは「信仰の父」として敬われる人物です。アブラハムは神様が彼に臨んで、男子イサクを与えられます。しかし、神様からイサクの誕生を告げられた時、そんなことはあり得ないと、秘かに笑ったのです。妻サライも同じです。こんな年寄り夫婦に子どもがうまれるなんてあり得ないと、二人共とも笑い、神様の言われることを信じなかったのです。ですからこの系図は立派な系図ではなくて、神様のおっしゃることを真にうけなかったアブラハムから、とんでもないことをやってのけたダビデ、そういう人が先祖にいるという、そういう系図なんです。それだけでも私たちは聖書の記事を真に受けて信じていいのではないか。

◆先ほど申しましたように、私達一人一人の存在が、アブラハムの場合がそうだったように、正に神様の御意思によってアブラムとサライは独り子イサクを与えられたのです。その時、アブラハムは百歳ですよ。妻のサライは九十歳ですよ。そんな年寄りに子どもが産まれると言われても信じないのが自然と言えば自然です。そんなことあり得ません

と、御使が語っても二人は笑ったのです。しかし実際にイサクが生まれるのです。それからずーっと、この系図はイエス様に至るまでの42代を書いてあるわけです。そして、その時に神様は、アブラハムに、神様の「約束の印」として生まれた子に、八日目に割礼を授けることを求められたのです。割礼が私とあなたとの「契約の印」だと言われた。それからイスラエルの人たちは八日目に割礼を授けて、名前を付ける。それをずーっと今日まで守ってきたわけです。バプテスマのヨハネもそうだったのですね。イエス様の場合も、「イエス」という名をつけなさいと、御使が言いました。「イエス」という名は「神は救い」或いは「神の救い」を表わす、「ヨシュヤ」という名前の砕けた表現です。そのような次第でありまして、わたしはこの系図の、ひいては聖書の真実さ、正直さを、信じてよいと思います。そしてそのような末にイエス様がお生まれになったのです。

◆そして今読んでいただきました中にこうありましたね。「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである」と。今申しましたように、アブラハムは、後には、彼は神様のおっしゃることは真に受ける人になって行きました。しかし、最初は神様のおっしゃることを信じない人でした。ダビデはとんでもない人物でした。そういう子孫の中に処女懐胎ということが起こるわけです。そしてこのイエス様については、「この子は自分の民を罪から救う」と記されています。こういう系図の中からイエス様がお生まれになって、不信と不倫の罪を贖われるのです。そのようなことでありまして、キリスト教というのは何と言っても奇跡を信じる宗教なのです。キリストを拝む宗教です。そして先週の割礼のこと、そして今日のこのイエス様の誕生次第の事などを通して、私たちは、この私という存在は神様の御意思による無比な存在であり、そればかりか文字通り初めであり終わりであられる神様が、終生共に居まして下さるところの御方であるということに聖書は私たちに語っているわけです。処女マリアに神の独り子イエス・キリストが宿り給うたことが奇跡であるように、神がこの私と終世共に居ましてその善き御心をこの私のために行ってくださいということは奇跡の中の奇跡であります。それで私たちは神の御独り子であられるイエス・キリストの処女降誕を祝いつつ、そのことに匹敵するほど驚くべき、自分自身の存在の無比性を感謝しつつクリスマスを迎えたいと思います。そして本当にみんなが、己が幸いとしてキリストを拝む。そういうクリスマスを迎えたいと思います。

◆お祈りいたします

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。

あなたが私たちを思い、私たちの為になさって下さることは、私たちの思いをはるかに超えていますけれども、あなたはその事を御霊によって私たち示し、その恵み、幸いを己が事として受け入れ、信じる恵みを賜いました。どうか私たちが己を愛し、また全ての人を己のごとく愛して歩むことができますように。そしてあなたが喜び給うクリスマスを迎えることができますよう導いてください。この祈りイエス様のみ名を通しみ前におささげいたします。アーメン。